

「京都を学ぶセミナー洛西編」第3回（開催報告）

2020年8月8日
京都学・歴彩館
075-723-4835

2018年度から開始した「洛西の文化資源」研究プロジェクトの成果を分かりやすく解説する「京都を学ぶセミナー【洛西編】」第3回を、下記のとおり開催しましたので報告します。

記

- 日 時 2020年8月8日（土）13:30～15:00
- 会 場 京都学・歴彩館大ホール
- 参加者数 228名
- 内 容 講 演 京都橋大学教授 野田 泰三
「三好から明智、細川へ一主家を渡り歩いた洛西土豪」

■ セミナーの様子と当日の参加者の声

第3回セミナーでは、郡・下桂を拠点とした中路氏を素材に、洛西土豪について講演があった。土曜日であり、人気のテーマであったためか、ほぼ満席となった。

室町時代中期以降、荘園村落から台頭してきた新興の武士階層である土豪がおとな（年寄、乙名）として村の運営を主導するようになる。土豪たちは大名やその家臣の被官となり地域支配の一翼を担ったが、逆に土豪たちの動静が大名権力を規制することもあり、地域社会に少なからぬ影響を与えた。

洛西の土豪である中路氏は15世紀後半以降に台頭した。近隣荘園の代官をつとめ資産を蓄積していった。用水相論で地域を代表する一方、細川・三好政権下で被官として地域社会の末端を担っていた。織豊期から近世初頭にかけての中路氏には、帰農し庄屋役を務めるようになったもの、松永久秀・明智光秀・細川家に仕え主家とともに転封を繰り返し在地性を失っていったものがいたことが報告された。また、洛西には同様の土豪として神足氏がいたことも紹介された。

「戦国時代の世、権力者とどのようにかわりをもったかがよく解った」、「東寺百合文書の重要性も良くわかりました」など参加者から好評を博した。

